

宮崎市立本郷小学校の学力向上への取組

1 学校の概要

本校は、宮崎市南西部の高台に位置する児童数 823 名、教職員 47 名（※9月1日現在）の創立 27 周年目を迎える大規模校である。近年、新興住宅地の建設に伴い、児童数は増加傾向にあり、児童の入れ替わりも激しい。比較的、家庭・地域環境が安定しており、PTA活動も活発でよくまとまり計画的な活動を展開している。保護者の教育への関心は高く、学校参観日への出席率もかなり高い。また、子ども会も組織がしっかりしており活発である。

現在、本校では学校行事の精選と充実、長期休業中の効果的な活用等、二学期制の更なる充実を図るとともに、あらゆる分野で調和のとれた教育実践に努めている。特に、校内研究においては、一昨年度の「小・中学校連携による学力向上」の指定研究の成果を踏まえ、本年度も国語科に領域を絞り研究を進めている。基礎学力向上のための言語能力の育成、朝の読書活動やパワーアップタイムの充実が課題である。

2 児童の実態

全体的に素直で礼儀正しく、行動も落ち着いており自主性も培われつつある。学力は全国平均をやや上回っている。

資料1：基礎学力調査結果

過去3年間の基礎学力調査結果及び毎年校内で実施しているNRT検査結果は右記の通りである。

年度	本校平均	県平均
14	70.8	70.0
15	73.3	71.9
16	77.0	75.2

本年度実施のNRT検査結果を男女別に見ると男子が51.8、女子が54.0で、国語・算数ともに女子の方が高い結果となっている。これは、日頃の授業や家庭学習の取組が表れているのではないかと推測する。読書量についても女子の方が多いが、これもこの差の背景と思われる。

資料2：NRT検査結果（学校平均）

年度	国語	算数	全体
15	49.9	51.8	50.9
16	51.7	51.3	51.5
17	53.5	52.3	52.9

3 学力向上に向けた経営方針

本年度の学校教育目標達成のための重点努力事項の1つに「基礎学力の向上（基礎的・基本的事項の習熟と学び方の習得）」を掲げている。その具体的方策として、下記の4点を数値目標として設定し、基礎・基本の定着を図るための学習指導方法の工夫改善に努めている。

- (1) 研究主題「国語科における言語能力の育成」に関する職員研修を年20回実施し、職員の指導力向上を図る。
- (2) 朝のパワーアップタイムを年間60回以上実施する。
- (3) 学力検査において、県・市平均の2.0ポイントアップを目指す。
- (4) 「読書貯金通帳」を活用し、個人目標を設定した読書量アップを図る。

4 教育課程内の取組

- (1) 主題研究である国語科を中心とした実践研究の推進

国語科学習指導に焦点を当てた言語能力の育成は、全ての教育活動の根幹となるものである。言語能力の育成を通して、児童に様々な学び方を習得させる指導を行えば、知的好奇心も伸張

され、個に応じた自己実現が可能となり、児童一人一人の学力の向上に大きく貢献できるものである。

本年度は、国語科の説明文の指導において、基礎的・基本的な内容、特に「言語事項」の確実な定着を目指した学習指導の在り方に関する研究に取り組んでいる。本研究の成果は、言語に関する能力を育成することができ、児童の国語力の向上につながり、ひいては他教科においても学力の向上や「生きる力」の基礎になるものとする。

以下、授業研究において特に重要視している点について述べる。

① 言語事項の洗い出し

下記のような言語事項に視点を当てた構成表を教材分析の際に作成し、指導の焦点化を図っている。

(例1：第2学年「たんぽぽ」東京書籍)

			書き手の論理展開	言語事項			
				重要語句	指示接続語	文末表現	主語・述語
話題提示	じょうぶさ	①	・たんぽぽはじょうぶな草です。	・じょうぶ ・ふまれる ・つみとられる		・です。 ・きます。 ・つくりだすの です。	・たんぽぽは～ です。
		②	・たんぽぽの根は長い	・また ・もの ^も		・みました。 ・ありました。	

② 言語事項を確実に身に付けさせるための工夫

指導案の指導観に、授業の意図として言語事項の指導を具体的に明記するようにした。特に本時においては、下記のような言語事項を確実に身に付けさせるための工夫を具体的に示し、事後の授業研究会においてその効能について協議することで指導力の向上を図ることとした。

(例2：第2学年「たんぽぽ」東京書籍)

○ はっきりした発音で話すことができるように、教材文の音読や自分の考えを発表する際には、聞き手に分かりやすい声の大きさや口の開け方を意識できる「声のものさし」や口形表を活用する。
○ 文の構成の基礎となる主語述語の関係が理解できるように、サイドラインを引いたり省略されている主語を書き込むことを通し、主語と述語が視覚的に照応できるようにする。

③ 達成状況に応じた支援

指導と評価の一体化を目指し、指導案に形成的評価と支援の手立てを位置付け、達成状況に応じた支援を明記することにした。

本時の評価〔重点評価事項「読む力」〕(例3：第2学年「たんぽぽ」東京書籍)

段階	評価規準についての達成状況	達成状況に応じた支援
A	○ 時間の経過を表す言葉が分かり、花の開閉についての説明を読み取ることができる。	○ Aの児童には、時間の経過を表す言葉がほかにどのようなものがあるか考えさせ、語彙が広がるようにする。
B	○ 時間の経過を表す言葉に注意して、花の開閉についての説明を読み取ることができる。	
C	○ 時間を表す言葉が把握できないため、花の開閉との関連を理解することが困難である。	○ Cの児童には、時間の経過を絵を手がかりにして言葉や文の意味をとらえることができるように支援する。

5 教育課程外の取組

(1) パワーアップタイムを活用した繰り返し学習の実施

読み・書き・計算は学力の根幹をなすもので、授業以外の場面で繰り返し練習を行うことにより、一層基礎・基本の定着を図ることができる。

本校ではこの時間をパワーアップタイムと名付け、基本的に火曜日と金曜日の週2回を校時程に位置付けている。

パワーアップタイムにおける学習内容については学年・学級の実態に応じて各学級担任によって決定されている。利用されている「パワーアップドリル」は平成14・15年度指定研究「小・中連携教育(学力向上)」の際に作成された学習問題集である。この学習問題集は国語・社会・算数・理科で構成され、高学年の問題は中学校でも使用され小学校段階の学習の定着が必要な生徒が活用できるようになっている。

さらに、学年掲示板の一角にパワーアップコーナーを設けている。パワーアップコーナーでの問題はパワーアップタイムで学習した問題をもとにしているが、クイズ形式にするなど休み時間でも児童が親しめるように工夫を行っている。

また、水曜日を読書タイムとし、読む力の育成を目指している。なお、週に一度ボランティアの方達による読み聞かせの時間も同時に実施されており、読書への親しみを高めるよう工夫を行っている。

(2) 「読書貯金通帳」を活用した読書量アップ

平成17年度より、児童の読書意欲を高揚させるための手立てとして全校児童に読書貯金通帳を配付した。低学年は、本の題名と冊数を記入させ、3年生以上は、本の題名とページ数を記入させた。その結果を図書委員会で年間5回クラス・学年ごとに集計し、各学年1名ずつ多読賞を決定し、結果を校内4箇所に掲示したり、賞状を作って表彰式を学年集会等で行っている。下記の表は、昨年度1年間の学年ごとの児童一人当たりの平均冊数と、本年度5月分の児童一人当たりの平均冊数である。表1・表2を比較すると、今まで1年間で20冊も読まなかった学年が、5月の1ヶ月間で昨年の1年間の読書量を超す冊数を読破できていることがわかる。

平成16年度 1年間の学校図書貸し出し冊数 (表1)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
児童一人当たりの平均冊数	38	19	19	14	17	10

平成17年度 5月の学校図書貸し出し冊数 (表2)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
児童一人当たりの平均冊数	3	17	18	16	10	5

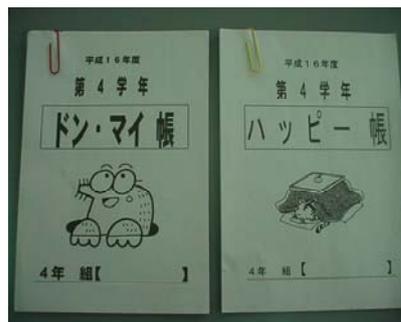
※1年生は、5月中旬より学校図書貸し出しを開始。読書貯金通帳は、6月より実施した。

※2年生から6年生は、5月より読書貯金通帳を実施した。

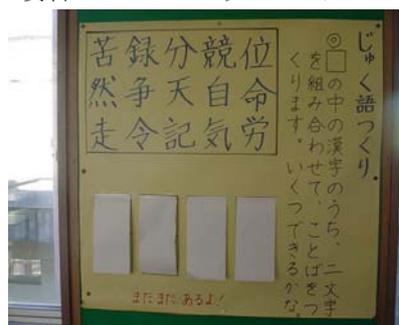
資料3：パワーアップタイムの様子



資料4：パワーアップドリル



資料5：パワーアップコーナー

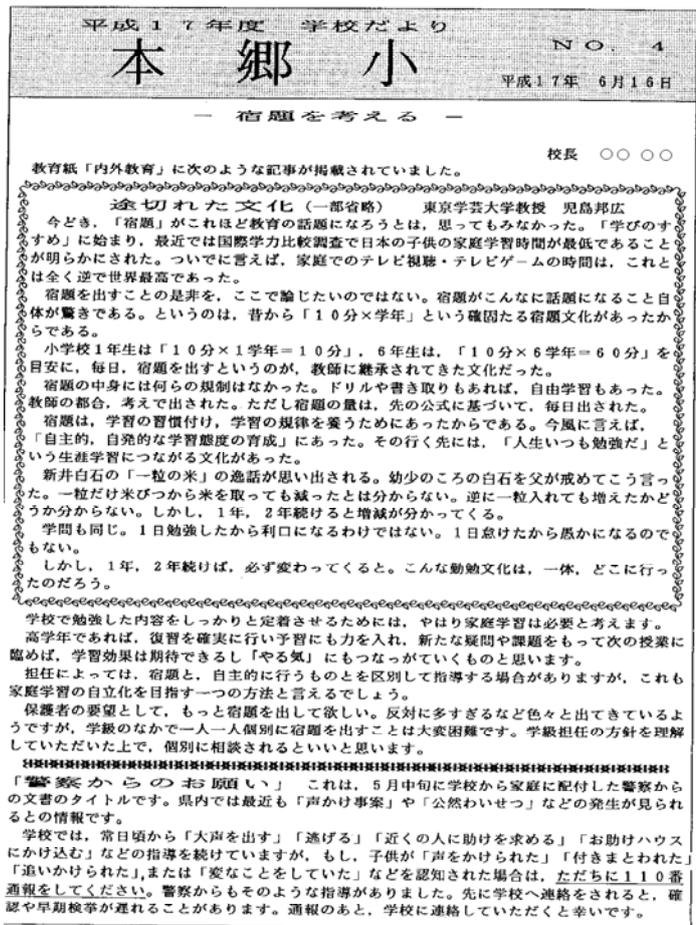


6 保護者・家庭、地域との連携

本校では、夏休み前と冬休み前の2回、個別面談を実施している。学力検査等の結果や、学習・生活状況を面談資料として準備し、個に応じた支援の在り方や家庭での協力等について連携を深めている。

また、右記のような「学校便り」を適宜配布し、積極的な情報公開や家庭・地域の教育力向上のための啓発に努めている。

資料6：学校だより「本郷小」（6月号）



7 成果と課題（次年度の取組を含む）

(1) 成果

- 研究授業を通して、言語事項の洗い出しや確実に身に付けさせる工夫を講じることで、教員の指導力向上が図られつつある。また、個の達成状況に応じた支援が効率的に行われるようになってきた。
- パワーアップタイムの設置により、ドリル学習の習慣化と基礎的・基本的事項の確実な定着が図られつつある。
- 読書貯金通帳の記入を始めてから、休み時間や昼休み、自宅での読書量が急激に増えるなど、大変意欲的に読書に取り組むようになってきた。また、創作絵本・紙芝居・童話コンテストへの応募数も増加し、想像力や書く力が培われつつある。
- 学校評価や個人面談を通して、学校教育や学級担任への期待がさらに高まりつつある。

(2) 課題

- 言語事項を確実に身に付けさせるための方策について、さらに実効性のあるものにしていく。また、達成状況の評価と支援の在り方については、今後、適時制と即応性を考慮した研究を深めていく必要がある。
- パワーアップタイムの有効活用のため、活動紹介等を含めた研修を行い、内容充実を図っていく必要がある。
- 読書貯金通帳の活用については、読書量のアップに加えて質の向上も今後検討していく必要がある。
- 家庭の教育力の温度差にどう対応していくか、更なる啓発の必要性を感じる。学力向上に関する外部評価を今後積極的に検討していく必要がある。